

ここに言う改作とは、模写ではない。短歌からの着想である。今のところ、一つの画論であって、少しづつ実行に移している段階である。だから、改作という着想、画論について書く。既にこういう理論、画論が在るかも知れないが、私は読んだ事がない。もしあれば、読者諸兄姉よ御教示下され。

短歌の世界には、改作という手法がある。創始者はたしか斎藤茂吉である。自分の好きな先達の秀歌を改作するのである。相手が先達だからなかなか難しい。うっかりすると、改悪になる。しかし、何度もやっているうちに先達の秀歌とは全く違った新しい作品が生まれる。秀歌に至るのも夢ではない。自分の作品を直し直し、改作して行くのが、本当の推敲である。短歌の原点は万葉にあるが、万葉の神髄は単純化にある。自然や人間の喜怒哀楽をまったく自由自在に、さわやかに、一直線に、単純に歌い上げている。

淡彩画もそうである。いかに単純化するかが、淡彩画の生命である。それには、改作がいいと思う。くどいようだが、模写ではない。私はむかし、ある人から模写を勧められたことがあった。自分の画についてである。しかし、これは失敗に終わった。模写という観念があると、いくら描いても同じような作品になるからである。

5年前になるかな、岐阜の山奥の<sup>つけちきょう</sup>附知狭にある熊谷守一記念館を尋ねたことがある。守一さん生涯の作品が大きな建物に沢山陳列されていた。ああ、これだな、と思った。丁寧に描いた写実的な作品から晩年の天下無敵自由自在な小品に至るまで、絢爛剛毅にして、しかもなお、繊細窮まる静物画までが手際よく、すがすがしく在った。

偉大な先達が一生かけて辿りついた所へ、われわれが辿りつくには自作の改作以外には無いと思う。我々は皆 50、60、70歳を過ぎてから描き始めたのだから。そのかわり、専門家（美校、芸大卒）の経験したことのない世界を知っているし、彼等に勝るとも劣らない人格識見を持っている。ここに、彼等を追い抜く改作というノウ・ハウが隠されていると思う。一点の6号の風景を仕上げるのに、あるいは1号の静物を完成させるのに何枚の改作をするかで勝負は決ってくる。

野菊を描いたとする。初めは徹底的に観察して野菊そのものを描いて帰る。これを前にして、改作に入る。10枚目あたりまでは、無駄な線が実に多い。30枚を越す頃から、無駄な線が少くなる。50枚を越えると省略の要領が自分にも見えて来る。おそらく100枚に至ったら、見事な素描が出来ると違いない。50枚以上描くには、半日1日は掛かる。飽きたら、ほかの何かに移り、気分転換してまた還ってくるのである。

こうして描いた自分の改作を畳の上に並べて見ると、先達の生涯を自らが辿ったような気分になってくる。これこそ、絵描き冥利というものである。以上が、短歌制作から気づいた私の画論である。今回は福生の銘酒嘉泉コップ2杯。 （平成 13-12-10）